

Titibu1072

平成22年4月号 秩父107号 p7

平成22年度埼玉60総会記念講演(要旨)

「兵站の街十条」



陸上自衛隊東北方面後方支援隊副隊長
一等陸佐 須田俊彦氏

十条駐屯地は、陸・海・空自衛隊の兵站中枢となっていますが、その周辺は、明治時代の当初から軍都として発展し、旧軍の時代も兵站到深い縁のある地域でした。現在の十条駐屯地の状況は、陸・海・空自衛隊等と一緒に所在し、約3000人が勤務しています。主な所在部隊は、陸上自衛隊の補給統制本部、海・空自衛隊の補給本部等及び北関東防衛局調達部の一部です。

十条駐屯地の沿革は、まず、明治38年に「東京砲兵工廠銃包製造所」が創設されました。駐屯地の記念碑には、次のように設立の経緯が記述されています。

『大和国奈保山 元明天皇御陵碑石片材

明治三十七年露国ト戦端ヲ啓クヤ銃包ノ用極メテ 夥シ。官製造所ヲ増築ス。三十八年一月新二地ヲ十条ニ相ビ、四月起

工シ、十一月二至ッテ成リ、十二月此地ニ移ル。職工五千有餘名^{あいはか}ヲ謀リ、^{しす}賞ヲ損テ財ヲ^{あつ}醸メ木石ヲ前庭ニ移植シ、以テ他日ノ記念ト為ス。 明治三十九年三月 製造所長陸軍砲兵少佐從六位勲五等 澤 茂三吉 誌』。

日露戦争の弾薬の大量消費に対処するため、わずか8カ月の突貫工事で完成させたことから、当時の緊急性が窺われます。その後、昭和15年に「東京第1陸軍造兵廠」となりましたが、終戦により米軍が進駐し、昭和33年まで「極東米国陸軍東京兵器廠」として使用されました。

そして、昭和34年3月霞ヶ浦駐屯地十条分屯地として開設され、武器補給処十条支処が移駐し、昭和35年1月には、分屯地から駐屯地に昇格しましたが、赤煉瓦の建物群と道路の両側に植えられた椎の老大木が有名でした。平成6年11月から「防衛庁移転事業(施設再配置事業)」に伴う工事に着手し、平成9年の春に庁舎A・B・Cの工事が完了、「補給処の集約一元化事業」とも連動して、平成10年3月末に陸自補給統制本部が新編され、現在に至っています。

ただし、十条周辺は、明治38年のかなり以前から軍都として開発されており、その起源は、明治5年の「赤羽火薬庫」建設時まで遡ります。この地が選ばれた理由は、石神井川の利用、人家が稀で安全、物資の運搬に便利ということでした。しかしながら、その後、危険なイメージ、用水権の侵害、村への負担の押し付け等の理由から、軍と地元との緊張関係が高まりましたが、改善のため、明治20年に「近衛工兵中隊及び第1師団工兵第1大隊」が大手町から赤羽に移転しました。その他にも、荒川での架橋訓練が容易、人家が隔離し爆破訓練に適、赤羽停車場・荒川舟運の活用可能、

地価が安く将来の拡張の余地、という環境条件の理由がありました。

更に、明治24年赤羽に「被服倉庫」、明治28年「板橋火薬製造所王子製薬場」、明治30年「海軍下瀬火薬製造所」等が逐次に設置されました。

そして、明治38年の「東京砲兵工廠銃包製造所」創設となるわけですが、同時に「豊島貯弾場」・「滝野川雷こう場」、明治39年「陸軍兵器廠板橋兵器庫」が設置され、大正8年には「陸軍被服廠の全機関」が赤羽に移転し、昭和15年になると「陸軍兵器本部」新設され、それに伴う改編も実施されました。

昭和20年の終戦により、軍用地が国有地として接收され、米軍が「極東米国陸軍東京兵器廠」として旧軍用地の約半分を使用しました。昭和21年には、旧陸軍赤羽火薬庫跡地が解放され、昭和27年・30年・33年と逐次に米軍用地も還されて、昭和46年に最後の「キャンプ王子」が返還されました。

以上のように、十条周辺は、明治の初期から軍都・兵站の街として発展しましたが、軍事施設が設置される毎に商業・工業も発展し、人口増加に伴って商店街が形成され、地域経済の発展にも大きく貢献してきました。